

## 第1分科会

# 地域の協同がつくる コミュニティ・ ケア

菅野正純（日本労働者協同組合  
連合会）



（おことわり）筆者（コーディネーター）の怠惰と時間の都合から、メモに基づいて、特徴的と思われた報告と議論のみのご紹介となります。報告全体については、当日の資料集をご参照ください。

### 《生協活動から足元の「縁」づくりへ——えんの会》

田代久美枝さんは、Fコープ生協の40代、50代の女性たちが始めた「足元からの助け合い＝縁づくり」についてご報告いただきました。

取り組みのきっかけは、ヘルパーが見限って家族に返そうとした痴呆の高齢者をサポートすることからでした。遠くへ行く、特殊なボランティアではなく、「自分の家を開き」近隣で助け合う当たり前の地域福祉をめざしました。

まずは「えんの会」を開催、学習活動から始めました。「誰かにしてもらおう」ではなく、「自分たちで何とかする力」を身につけるためでした。1年間活動してきて、「うつ」や不登校、総じて「コミュニケーション障害」が本当に多いことに気づきました。メン

バーは10人が30人（とくに子育て中のおかあさんが）となり、「私たちが何とかする」「新生パワー」が生まれ、いろいろな講師ができる人を育てて、自治体に人を派遣するところにまできました。そうしてみると、今まで、自分たちが力を持っているのに、自分でそれを抑えてしまっていたかにも気づきました。

えんの会の活動の中で、生協が地域を組織しているはずなのに、協同組合がやっている取り組みが行政にこれっぽっちも理解されていないことがわかり、コミュニティといっしょにやっていくこと、「顔の見える個人の組織」をつくりだしていく必要を痛感しています。

活動する資金ぐらい自分たちでつくろうと、4人がビル管理の仕事をするなど、会の中にワーカーズもつくりだされました。「どうやったら稼げるのか」講座、北九州市の計画に対する政策提言の勉強会、「障害者問題からまちづくりへ」の研究会、「地域コーディネーター養成講座」など、えんの会はさらに豊かな展開を見せています。

## 報告者

田代久美枝さん（おとなりさんネットワーク「えん」）  
稲月秀雄さん（福岡高齢者福祉生協・ひまわり福祉サービス）  
宮村貴幸さん（喫茶レストランPIKO・POKO）  
岩佐えり子さん（大阪高齢者生協・ほっとステーション御殿山）  
荒川英雄さん（古賀市保健福祉部）  
森田靖子さん（センター事業団・まごころの家）

## コメンテーター

井上英晴さん（九州保健福祉大学）

## コーディネーター

菅野正純（日本労協連）

## 《全員が「地域コミュニティ窓口」に ——ひまわり福祉サービス》

平成12年から福岡県高齢者生協・ひまわり福祉サービスに関わってこられた稲月秀雄さんは、ご自分の「個人史」から協同の活動と思いを次のように語られました。

中学校のとき、大工だった父親が脳内出血で倒れ、障害者となったために、翌月から収入がなくなるという経験をしました。そのとき、あるお坊さんから言われた言葉が忘れられずに残っています。「人というのは、もともと何も無い。ゼロ基準だ。動いて初めて何かが出来てくる」「人とつながりなさい。何かを生み出し、その中から自分の夢や希望を育てなさい」と。それが、いま思えば、「協同」や「コミュニティ」ということではないかと考えられます。

戸畑工業高校の事務職、北九州市生涯学習課、学校教師として働き、今年1月から福祉センター長として本格的に高齢協の活動に関わり始めましたが、戸畑工業高校で、八幡製鉄の下請けリストラで授業料未納者が大量に出て、百数十人の未納者の家を全部回りました。すべては、人との出会いだと感

じています。

福祉センターの活動でも、ヘルパーの担い手を求めていったとき、PTAのつながりの中に人がいました。地域の中には活用されていない人がいるのです。「よそ者」にはなかなか溶け込めない保守的な地域だと言われていても、青年会や消防団にも入っていったら、受け入れられ、とてもよく地域に根を広げることができました。

いま考えていることは、職員40人が、福祉生協の理念をどれだけ語れるか、ということです。そのきっかけとして全員が「地域コミュニティ窓口」になることに取り組んでいます。具体的には、自分の名前で福祉生協の広報物を地域に配ることで、これによって福祉生協に対する質問が、その人に集まってきて、コミュニケーションが始まります。

協同組合が民間企業と違うのは、「社長おれがつくった、私がつくったという人」が協同組合にはいないこと、「地位が上がると現場の組合員が見えなくなる」ということがないことです。経営が苦しくなっても、最後まで理念が先立ち、組織の中でも

外に対しても「社会的道徳」をつらぬくのが協同組合であるにとらえて、発展させていきたい。

### 《井上英晴先生のミニ講座》

報告を一通りうかがって、井上先生から「福祉のまちづくり」のための基本に立ち帰って、考え方を深めるための「ミニ講座」をしていただきました。

「福祉のまち」とは：施設・制度・サービスが整っている「保障のまち」であり、障害者が当たり前に進学でき、当たり前就職し、結婚し、子育てができる「福祉のまち」

「ケア」とは：「介護」「お世話」のニュアンスだが、「共に暮らしていこう」「そのことを態度・行為で示していこう」とする積極的な共生行為。運んでいって与えるものではなく、その人との協働(コラボレーション)、共同制作し、相手をパートナーとする共同行為。

「コミュニティ」とは：「本人」「家族」「親族」「友人」「仲間」「知人」「見知らぬ人」「サービスを提供する人」へと広がる「パーソナルネットワーク」。「サポティブな関係」「ソーシャル・サポート」を不可欠の要素とし、「われわれ」という「共属感情」「相互依存」「役割」にもとづく「パーソナル・コミュニティ」を本旨とする。

「コミュニティケア」とは：「care in the community (コミュニティにおけるケア)」「care by the community (コミュニティによるケア)」の両方を含む、サービスとサポートの「関係的利用」。もともとインフォーマルなものであり、「精神障害者が病院を出たり入ったりというあり方はおかしい」というところから形成されてきた考え方。

「自立」とは：アメリカから出てきた考え方で、「ボタンのかけられない人が、サポートを受けて働きに行く・外出する」「依存的自立(independence)」と、自尊感情の持てる「セルフヘルプ(自分を助けることを助ける)」から成る。人間には自尊感情と共属感情の両方が必要であり、これはコミュニティとコミュニティケアによってつくられる。お年寄りの場合に当てはめれば、必要なのは、家族・親族を拠点として地域社会を生活の場にする「地域コミュニティケア」であって、家を生活の場にしてしまう「在宅ケア」、施設を生活の場にしてしまう「施設ケア」は、共に限界を持っている。

社会サービスとは：普遍的サービスを利用しながら生活することを保障するのが、本来のあり方。それがうまくいかないことから生活の困難が発生し、特殊なサービスである「社会福祉サービス」が必要となり、提供されるようになる。「地域福祉計画」の基本は、普遍的サービスで生活していくことでなければならない。「養護学校を別につくる必要はない」。

### 《行政・自治体にどう働きかけるか》

討論の中で、フロアの「ヘルパーステーションはござき」から「老人クラブへの補助金が、内容のチェックなしに連綿と続く一方で、新しい有益な活動に補助がこない」「福岡市のまちづくり補助金にヘルパー講座を申請したところ、『そのひとたちの利益にしかならない“人づくり”は、地域づくりである“まちづくり”にはならない』と言われたがどう思うか」という質問が出され、古賀市保健福祉部の荒川さんから、次のようなアドバイスがありました。

「これまでは、議会が補助金の使い道

をチェックせず、自治体の裁量による判断が優先してきたが、団体(に対する)補助から事業(に対する)補助への転換が始まっており、政策立案が重要になってくる。平成15年の「地域福祉計画」策定は、提案能力のある組織にとって大きなチャンスとなりうる。また、これまでの考え方では、「地域」とは支配のためのエリアでしかなかったが、今後は、人と人とのつながりがますます地域としてとらえられるようになるだろう。

### 《ケアワーカーが高齢協加入を訴えることの是非をめぐって》

やはりフロアから、兵庫高齢協の参加者が、次のような問題が提起されました。

「ケアワーカーが、利用者に高齢協の組合員になることを訴えるのは、職権の濫用ではないかということで、自らブレーキをかける傾向がある。しかし、コミュニティケアを充実させるという観点から問題を考え、CC共済にも取り組む必要があると考えている。ごみ出しや蛍光灯の取り替えなどの助け合い活動を喜んでやってくれる高齢協の組合員は多く、班の組織や地域集会、『地域が見える組合員組織』が重要だ。姫路で高齢協の支部をつくるときにも、『地域の点と点を結ぶ中核に高齢協が座ってほしい』という要望が地域から出されている。」

これに対して大阪高齢協の岩佐さんから、「密室ケアからグループケアへ、さらに働くことが生きることそのものになるケアの時代だ。高齢協のステーションが、『夢をつくる仲間を増やす』ことは当然であり、ワーカー自身が『仲間をつくる』先頭に立ちたい」という発現がなされ、会場からの共感を集めました。

### 《福祉のまちづくりへ——新たな息吹》

最後に、報告者、コーディネーターの“まとめ”から。

「相手を対象者にしたら、組合員には入ってこない。ケアする方とされる方を分けるのではなく、ケアしたりされたりする関係をどうつくるか」(えんの会・田代さん)

「職員の人にこそこういう集会に来てほしい。中身を知らない限りは『動員』になってしまう」(ひまわり福祉サービス・稲月さん)

「ICA東京大会を思い出しながら聞いていた、『(新しい協同が)確実に育っているな』と。地域は人=連帯がベース。『スキル(技術)からウィル(意志へ)』。地域福祉の企画からの市民参加を。参加=take partとは、一つの部分を責任をもって関わること。

一人称「学ぶ」、二人称「相手を」、三人称「協同」の「生きがいの三次元」が豊かに広がるインテグレーション(統合社会)へ」(荒川さん)

「少子化だが、人々は本音では『(子どもを)3人はほしい』と答えている。1人だとマザコン、2人だと「好きか嫌いか」になってしまうが、3人で社会的関係が形成される。同じように第三者的关系をつくるのがコミュニティ。家族に自閉した関係から、家族・本人・ワーカー・住民がそれぞれ相互に結び、『友人の友人が友人』になるコミュニティを発展させたい」(井上先生)

(文責はすべて筆者・菅野にあります。発言者の方々にはご寛恕を願います)